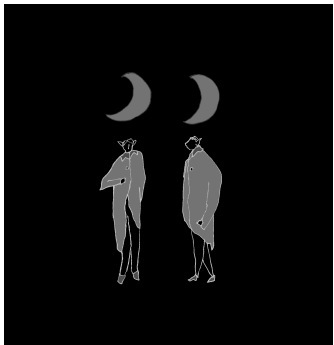


第8話
ふたつの月



時計を見ると、ちょうど午前一時だった。

地震からじきに丸一日が経ち、ミツキは思わぬ収穫を抱えて監督の待つ事務所の戸を叩いた。

「すまないね、こんな遅くに——」

監督はミツキの顔を見るなり謝ったが、本当に忙しいのはミツキより監督の方で、すっかり頬の肉が落ちていられるばかりか、睡眠が足りていないことが、ひと目でわかった。

「ピーナッツ・クラッシュヤーが見つかったって聞いたんだけど」

「ええ」

ミツキはトートバッグの中からエアパッキンにくるんだものを差し出した。

「昨日の地震で倉庫の棚が崩れて、その奥から出てきたんです」

監督は手渡された包みを慌ただしくほどき、中からあらわれたものを驚づかみにすると、「お

お」と声をあげて、「これだよ、これ」と感激をあらわにした。

何日か前にミツキが「これですか」と見せたらジオペンチは「違うよ、全然違う」と全面的に否定されたが、偶然、倉庫から見つけたこのピーナッツ・クラッシュャーは、何に似ているかといえ、やはりラジオペンチだった。

ただしペンチのように先が細くはなく、どちらかというと、平たくつぶれている。ちょうど殻付きピーナッツを挟むのに都合のいいサイズではあり、これが「ピーナッツ割り器」なのだいと云われれば、たしかにそうなのかな、と思わないでもなかった。

「もらったんだよ、旅の記念に」

「旅ですか」

「学生の頃のね」

「あの」とミツキはほんのわずかながら意地悪な表情を浮かべて尋ねた。「これ、本当に監督のおっしゃった映画に出てきました?」

「出てくるよ」

「あの、わたし今日、もういちど観てみたんですが、どこに出てくるのかわからなくて——」

「ほんの一瞬なんだよ。たぶん一秒か、せいぜい二秒かな。それでもオレは嬉しくてさ」

「それはあの——どうしてなんです？」

「こいつはまあ、記念の品っていうか、オレが学生時代に初めて撮った映画の——何て云ったらいいんだろう——魂みたいなものっていうか」

「はい？」

意味がわからなくてミツキが眉をひそめると、監督は早送りのボタンが押されたみたいに饒舌に話し始めた。

「オレは一応、その映画を認められて、こっちの世界にひろわれたんだけど、アメリカに友達がいたんだよ、たまたまね。遊びに来たって云われて行ったんだけど、そいつの故郷がジョージア州だった。めちゃくちゃだだっ広いところで、ニューヨークから見たらずっと南の方——」

話が止まらない。

「それで、その映画のタイトルも『南の犬』って

いうんだけど、もともと映画を撮るために行ったわけじゃないんだよ。あくまで観光でさ、たまたま持っていったビデオカメラで旅を記録してたわけ。個人的にね。だけど、撮ってるのはオレだから、オレは声だけで画面には出てこない。代わりにジョージア生まれジョージア育ちの友達がずっと映っていて、そいつがすごくいい顔をしてるんだよ。いちいち絵になるっていうか。だから、撮り始めたなら、もう自然とドキュメンタリー映画みたいになっちゃって——」

「ええ」とミツキは相槌あいづちを打つのがやっとだった。「まあ一応、オレのフレーミングもよかったと思うんだけど、現地の連中もみんな面構えがよくてさ、ピーナッツをつくってるんだよ。ちようど盛んに収穫しているところで、オレもけっこう手伝って、ピーナッツを積んだトラックと一緒に乗って、かなり長い距離を一晩中走って工場まで届けたり。そのあいだもずっとカメラは回しっ放しにして、そしたらね——」

そこで監督は言葉を切って目を閉じた。

「バーンとね。いや、そんなもんじゃないな。ドカーンと凄まじい音がして、車が吹っ飛ぶんじゃないかっていうくらいの音でさ。まあ、トラックって云っても、そんなデカいやつじゃないから、何かがぶつかったり当たったりすると音がね——いや、小石とかが風にあおられてビシビシ車体に当たるんだけど、それもそれなりの音がして、だけど、そんなもんじゃない。何かもう銃撃されたんじゃないかっていうくらいの音で。オレ、わけがわからないから恐くてさ。ビクついていたら、隣にいた友達が「犬を轢いたらしい」って。犬って云っても、ほとんど狼おおかみみたいな体の大きい野犬で、飼い犬とかじゃなくてね——」

監督が目をひらいた。

「犬を轢いたって云われると、たしかにそんな感じで、その瞬間もビデオを回していたから、ぼっちり撮れてた。音も衝撃もしっかりとらえていて、結局、そのシーンが映画のクライマックスになったんだよ。でね、それで何だかこっちとしては申し訳ないっていうかさ。もちろん、オレが轢いた

わけじゃないんだけど、それがたまたまオレの映画になっちゃって、おかげでオレはこうして映画の仕事をするようになってる。だから、なんだか犬に悪くて——」

「はい」とミツキはいつのまにか話に聞き入っていた。

「だから、タイトルも『南の犬』にしてさ、「あのときのあの犬に捧げる」って、クレジットも入れたんだけど、それでもまだ気がすまない——」

そこで監督は、ピーナッツ・クラッシュチャーを犬の頭のように撫でた。

「もし、オレがプロになって本物の映画を撮るときがきたら、犬のことを忘れないために何か目印みたいなものをフィルムの中に刻んでおこうと思つて、それで思いついたのが、ピーナッツ畑の連中にもらったこいつ——このピーナッツ・クラッシュチャーを出演させようと思つたわけ。と云つても、まだ助監督だったから、監督にバレないように小道具の——あのころはヤマちゃんかな——に相談して、端っこの方にちらりと映るようお願いして、

それでなんとか実現したわけ。一応、ひとまずそれで満足したんだけど、やっぱり自分が監督をして、しかも、ちょっとお金のかかった大きな映画を撮るなんてことになったら、そのときは、ちらりじゃなくて、しっかりこいつを画面に登場させようと狙^{ねら}ってたんだよ。それで今回、ついにそのときがきたと思って、いそいそと自分のロッカーを探したんだけど、どこへ行ったんだか見つからない。どうも、ヤマちゃんが他の小道具と一緒に倉庫に戻しちゃったらしくて、まあ、倉庫にあるならそれでもいいかと思いなおして、今回、クラック・インの前にざっと探してみただけど、まあ、どうにも見つからない——」

「それで、わたしに探してこい、と」

「そう。本当はこいつじゃないと意味なかったんだけど、映画は時間との戦いだからね、オレひとりの感傷でこだわっていられないし、似たようなものでいいだろうと。だけど、こうして無事に見つかったんだから、ホントによかった」

監督はそこまで話して、ふっと息をついた。思

わずミツキも息をつく。

「だからこれは犬の供養なんだよ、オレなりの
さ」

監督は急に声を落とした。

「しかし、こいつでピーナッツの殻を割るんだって連中は云ってたけど、じつは未だいまにどうやって割るのかオレにもよくわからない。こうやってあらためて見ると、ラジオペンチによく似てるし

——

「ですよね」

「まあ、もしかして、オレは連中にかつがれたのかもかもしれないね。だって、奴らはこんな道具なんか使わないで、素手でバキバキ割ってたから。でも、オレとしてはそういったことも引くくめての記念のブツなんだよ。オレにはわかるの。間違いないく、こいつにあのときの犬の魂が宿ってる。だから、あの犬のために、なんとしてもこいつを映画に出したい」

（あれっ？）とミツキはそこで思った。（こんなことが前にもあった）

デジャヴというやつだ。前にも誰かがこんなことを云って、「供養」とか「魂」という言葉を使って、「ふうん」とミツキは感心したのだ。

あれはいつのことだったか――。

事務所を出て撮影所の外通路を歩き、（いつだったっけ）（誰が云ったんだっけ）と考え考え歩かうち、自然と小道具倉庫にたどり着いて立ちどまった。

（そうだ、まえだ前田さんにもお礼を云わないと）

*

「いや、私は何もしてないですよ。感謝したいのは、むしろ私の方です。ミツキさんがあんまりおいしそうにコークハイを飲むもんだから、つい昔のことを思い出しちゃって」

前田さんは目を細めてそう云った。

「それってつまり、昔のことを思い出したのが楽しかったってことですか」

ミツキがそう訊くと、

「そうですね」

前田さんはしばらく考え、

「そういうことになりますかね」

うなず頷きながらそう答えた。

「じゃあ、いまは楽しくないんですか」

「いえ、そういうわけじゃないです。この倉庫はじつに居心地がいいし——シユッ——ここには本当になんでもありますし、ここにいると、自分は世界の番人をしているんだって思いますよ、ただね——」

前田さんは笑顔を引っ込めて片方の眉を上げた。

「ただ、私は——なんだろう——やっぱり人間が好きなんです。毎日、街の片隅でお酒をつくりつづけるっていうのは——シユッ——そういうことです。そこへいらっしやる皆さんに——まあ云ってみれば見ず知らずの人たちにです——夜な夜なお会いしてお話しさせていただくってことですから。楽しかったですね、ホント。あの頃はよかったですね、つくづく思います」

「え」とミツキは思わず口にしていた。「だった

ら、また、やったらいいじゃないですか」

「何をです？」

「バーテンダーをですよ」

「はい？」

前田さんは不思議なものを見るようにミツキの顔を眺めていた。

「だって、私はもう引退して——」

「そうでしたっけ？」

「そうですよ」

「お話を聞く限りでは、なりゆきでいつの間にか倉庫で働いていたというふうに関こえましたけど」

「いや、どっちにしろ、私はもう年齢的に考えても——」

「そうですか？ わたし、若いイケメンのバーテンさんもいいなって思いますけど、前田さんみたいなロマンス・グレーのバーテンさんにお酒をつくっていただくのが最高って思いますけど」

「本当に？」

「わたしなら、毎日通っちゃいますね」

そう答えながら、ミツキは内心、舌を出した。

本当を云えば、ミツキはほとんど酒が飲めないのだから、毎日通うということはない。ただ、昨日のコークハイはその名前から想像されるものを超越したまったく異次元の飲みものに思えた。ごく普通の素材を組み合わせているだけなのに、どうしてあんなに美味おいしいものになるのか――。

「プロフェッショナルとしか云いようがないです」

ミツキの言葉に前田さんは顎あごを上げて目を閉じた。

「そうですか――」

「そうですよ」

「そうですかねえ」

*

その翌日――。

懸案のピーナッツ・クラッシュヤーが見つかったおかげで心置きなく仕事の休みがとれ、ミツキは

このあいだ立ち寄った下北沢の古道具屋（イバラギ）へと出向いた。残念ながら、ラジオペンチは却下されてしまったが、なんとなくお礼を云いたかったのだ。

いや、本当を云うと、それは自分への云いわけのようなもので、実際は、もう一度あのおかしな店を仕事に関係なく訪ねたかった。

もらってきたショップ・カードを見ると「夜九時開店」とある。気持ち^{はや}が逸って八時四十分には店の前に到着していたが、意外にも店はすでにひらいているようで、決して明るいと云えないが、開店を示すあかりがついている。

店の中に入ると、このあいだ来たときと同じく、店主のイバラギが店の奥にひっそりと座っていた。どこからどう見ても眠そうで、しきりに目をこすっては眠気をさましてるように見える。

「ごめんください」

ミツキが声をかけると、イバラギは眠たげにミツキを認め、「あ、このあいだの」とすっかり覚えていたようだった。

それはまあよかつたのだが、ミツキが店の暗さに目が慣れてイバラギの様子を確認すると、彼は右手の親指の付け根あたりに白い包帯を巻いて机の上に休ませていた。

「すみません」と彼はなぜか頭を下げている。

「いえ」とミツキはそう応^{こた}えるしかない。

特に謝ってもらうようなことは何もないはずなのだが、この状況で「すみません」と云われてしまふと、「どうしたんです？」と訊かざるを得ない。

「^{けんしょうえん}腱鞘炎です」

イバラギはいかにも無念そうに答えた。

「最近、入荷した、この」と机の上に置かれた小型の天体望遠鏡を指差し、「これはへ月光増幅器」と名付けてみたんですが、こいつを磨き始めたら歯止めがきかなくなってしまうって、つい磨きすぎて、この有様です」

「そうでしたか」

「あの、失礼ですけど、お名前はなんと云いましたっけ。このあいだ名刺をいただいたと思うんで

すが——たしか映画会社の小道具係の——」

「はい。サワタリミツキといます」

「ミツキさん、いいお名前ですね。じゃあ、僕もミツキさんと呼んでもいいでしょうか」

(え?)とミツキはあまりに唐突で少し戸惑ったが、いい名前だと褒められた上でそんなことを云われたら首を横に振れなくなる。

「あ、わたしでよかったら」と変なことを云ってしまい、瞬時に顔が熱くなるのを感じて目を伏せた。

「ミツキさんは」とイバラギはさっそくそう呼び、「ミツキさんは利き手を怪我けがしたとき、どうやって薬をつけたり絆創膏ばんそうこうを貼はったりしますか?——

というか、ミツキさんはおひとりでお住まいでしょうか」

「ええ」

「そうですか。僕の場合はご覧のとおり絆創膏ではなく湿布なんですけど、僕もひとり暮らしですし、そのうえ僕は生粋の右利きでして——」

「はい」

ミツキは彼のおかしな物云いに笑いそうになった。「生粋の右利き」ってなんのことだろう——。「自分で云うのもなんですが、右手は人並み以上に器用じゃないかと思うんです。だけど、左手はまるで不器用で、ほとんど何もできません。だから、左手ひとつで湿布を貼るとなると——僕がどんな格好をして、どんなに無理な体勢に耐えてこの湿布を貼ったか——それはいまここでお話してきません」

「はい」

ミツキは我慢できなくて口の端から笑いつつあった。

(何を云ってるんだろう、この人) (でも、面白い) (ちょっと、というかかなり変わってる)

「ものすごく時間がかかったんです。三十分くらいでしょうか。つくづく思いました。自分にとつて右手は商売道具にして急所です。左手だけでは生活全般かかに関わることすべてがスローモーになつてしまいます」

「ああ、たしかにそうですね」

本当はもうひとつよくわからなかったが、ミツキは一応、話を合わせておいた。

「なにしろ、何でもかんでも遅くなってしまうんです。それで今日はいつもより三十分早く店へ来て、左手だけでなんとかシャツターを上げて、あれこれ開店準備をして——。そうしたら思いのほか早いところ片付いてしまって、それでいつもより三十分も早い開店になったんです。しかし、その分いつもより早く起きたせいで、ただでさえ眠いのに——ええ、コウモリ病なんですよ、僕。なのに、睡眠が足りなくて、いまはとにかく激しく眠たいです」

「はい。お話を聞かなくても、それはよくわかります」

「そうですか」

イバラギはしきりに頭を掻いた。

「でも、仕事はきわめてスローモーではありますけれど、しっかりこなしてしまして、このとおり、この〈月光増幅器〉を磨き終えて、細かいパーツの微調整もしまして、ようやく商品として整え終

わったんです」

「それってどんなものなんです？」

とミツキがそこで訊いてしまったのが運の尽きであつたか思わぬ幸運であつたか――。

「これはですね」とイバラギは負傷した右手を庇いながら〈月光増幅器〉を手に取り、

「どうぞ、ご覧ください」

促されて、ミツキは素直に覗のぞき窓まどに右目をあてがった。が、暗くてほんやりとして何も見えない。

「何も見えないですよね？」

イバラギが察したように云つた。

「部屋の中で覗いてもそんな調子です。なにしろ、これは月を観察するものですから。夜空に向けたときに初めて本領を發揮するんです。ただ、今夜は、さつき店をあけるときに確認したんですが、雲に隠れてしまったのか、このあたりに月はありませんでした」

（このあたり？）とミツキは内心、ツツコミを入れたくなつたが、イバラギがあまりに真剣に商品説明をしているので黙って聞いていた。

「でも、月さえ出ていたらこっちのもんです。こいつを宇宙に向けて覗きますとね、いいですか、なんと月がふたつに見えるんです。いえ、もちろん肉眼で見たらひとつです。しかし、こいつを使つて観察すると、必ずふたつになる。これは大変なことじゃないでしょうか」

（え？）とミツキはツツコミというより素朴な疑問を呈したくなった。（それは単にピントが合っていないだけなのでは？）（ピントが合っていないと、たしかにひとつのものがふたつにダブって見えることがある——それだけなのでは？）

「月がふたつ見えるということは、ミツキさん、どういふことかわかりますか。それはつまり、われわれのいるこの星もこの街も、もしかしたら自分自身もです、あるいはふたつずつ、二人ずついるのかもしれない」

（いや、そんなことはないと思うけど——と云つたら野暮になるのか）（というか、この人、本気でそう思っているのかしら、それとも、はつきり云ってガラクタと云うしかないものにハクをつけ

るためにこんなことを云っているのかしら）（わからない）（だけど、そのわからなさが、なんだか気になってしまう）

「だとしたらです。いまこうしているあいだにも、もうひとつの街やもうひとりの自分が存在する世界があつて、そっちの方の自分もしかして臆病にもなつていないし、コウモリ病にもなつていない。こんな夜の中ばかりを生きるんじゃない、元気よく昼の光を浴びて笑っているかもしれないんです。いや、これはこの〈月光増幅器〉に関係なく、この世の真実じゃないかと思うんですが」

いまこうしているあいだにも——とイバラギがそう云つたとき、ミツキはまたしても（あれっ？）と胸の中で何かが弾けるのを感じた。（こんなことが前にもあつた）（誰かが同じようなことを云っていた）

昨日、監督が云っていた「供養」や「魂」の話もそう——。

（あ、わかつた）

ミツキは自分の思いが小さな点にするすると収

まっつてゆくのを感じ、同時にいまさつきイバラギが「おひとりでお住まいでしょうか」と訊いたときに、なんとなくミツキの指のあたりを見ていたのは、手を負傷した話をしていたからではなかったのだとようやく気がついた。

気がついて、いまさらながらミツキは左手の薬指にはめられた指輪をそれとなくそっと隠した。

*

東京の西のはずれにTという街があり、その街のさらに西のはずれに〈第三キネマハウス〉という小さな映画館がある。

シュロはその映画館の前の歩道に立ち、月のない夜空を見上げる自分に苦笑した。

(こんなところまで来てしまうなんて) (どうかしてるな)

時計を見ると午後九時だった。

上映開始まで、まだ間がある。チケットはすでに入手済みだったし、さしあたって何もすること

がなかった。仕方なく見知らぬ街の街灯の下に立ち、チケットと一緒に貰い受けた映画館の発行しているリーフレットに目を通した。

「消えた男」というのが、これから観る映画のタイトルだった。監督も主演女優の名前もシユロは知らない。ざっと半世紀前に作られたもので、「よほどの映画通でもこの映画の存在は知らないかと思えます」とリーフレットには書かれていた。

一度も上映された形跡のないピンのフィルムが、この小さな映画館の倉庫で発見され、「当館はもちろん、記録を調べた限り、全国的にも今回が初上映の可能性がありません」とあった。「完成後になんらかの事情でお蔵入りになったものと思われ、そのようなフィルムが、なぜ当館の倉庫に残されていたかは、ただいま調査中です」

しかし、シユロの興味はそうしたマニアックな事情とは関係なかった。その映画の準主役と思われる動物病院の院長の役をシユロの父親が演じているのである。ただし、本当に父であるかどうかは実際に観てみないとわからない。たまたま、イ

インターネットで父親の名前を検索していたら、この映画の情報に行き当たり、「上映中」とあるのを見て駆けつけた次第だった。一応、これまでにシュロが手に入れた資料によれば、父親と同じ名前の俳優は他におらず、となれば、そこに父の名前が記載されている以上、出演しているものと考えてまず間違いない――。

リーフレットは文庫本をひとまわり大きくしたくらいのサイズで八ページほどの簡素なものだった。しかし、そこに記された上映中の映画に関する解説文は、読めば読むほど興味深く、シュロは街灯の下でいつの間にか読みふけていた。

「舞台は川のある下町で、路地のつきあたりに構えた動物病院に人間が担ぎ込まれたところから物語が始まります。担ぎ込まれた男は川に流されてきたらしく、息も絶え絶えで川辺に伏していました。それを動物病院で働く看護婦の光代みつよが見つけ、川べりの工場で働く男たちの手を借りて動物病院に運びます。動物病院の院長は腕は確かですが、大の酒好きであり、常に酒浸りで――」

と、そこまで読んでシユロは紙面から顔をあげ、
どうもこの調子でストーリーを細かく追っている
ようなので、映画を観てからつづきを読むことに
決めた。ただ、読むのをやめようと思ったところ
へ、「出演者について」と題されたコラムが目
にとまり、「もしかして」と字面を追ってゆくと、
主演格の女優だけではなく、シユロの父親——と
思われる——俳優についても寸評が書いてあった。
「院長を演じている田代龍一郎たしろりゆういちろうは、任侠にんきやうものの親
分から零落した貴族まで、あらゆる役を見事にこ
なしてきた名バイプレイヤーです。」

（本当に？）とシユロは我が目を疑ったが、その
あとに記された生年と来歴のデータを読む限り、
そこに紹介されているのはシユロの父親に違いな
い。

しかし、シユロは父親が「任侠ものの親分」を
演じた映画も「零落した貴族」に扮かんした映画も観
ていなかった。というより、そんな映画があった
こと自体、初耳だった。

上映までまだあったが、シユロはチケットを見

せて館内に入り、申し訳程度の小さなロビーを見まわすと、黒いスーツを着た、いかにも支配人然とした中年男を見つけて、「すみません」と声をかけた。リーフレットを示し、

「これを書いたのは、どなたでしょうか」

男に尋ねると、男がこの映画館の支配人であるというのはシユロの見立てどおりで、

「ああ、それは彼です」

男はロビーの一角を指差し、そこに所在なげに立っていた青年に「おい」と声をかけた。

「はい」

青年は顔をあげ、シユロと目が合うと、いかにも懐かしそうな、それでいて奇妙なものを目の当たりにしたような複雑な顔になった。